

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Long-term clinical outcomes and follow-up status in Japanese patients with familial adenomatous polyposis after radical surgery: a descriptive, retrospective cohort study from a single institute

(根治手術を受けた日本の家族性大腸腺腫症患者の長期予後と術後フォローアップ検査の調査報告(後ろ向き、単施設研究))

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学 専攻 器官・代謝制御 系

下部消化管外科学 (指導教授 池田 正孝)

氏 名 馬場谷 彰仁

目的：家族性大腸腺腫症(以下 FAP)は APC 遺伝子の生殖細胞系列変異を原因とする、常染色体優性遺伝疾患である。FAP 患者は無数の大腸腺腫を生じ、将来的に大腸癌を発症する。そのため、標準治療は大腸全摘とされている。日本における FAP の長期予後に関するデータは、全国的な登録が確立されていないため、明らかになっていない。我々は全生存期間、新生物の発病率、便失禁などに関して、当院で手術を受けた FAP 患者のフォローアップに関して評価した。

方法：1981 年から 2017 年までに当院で手術を受けた 154 人の FAP 患者に対して、アンケートを郵送した。結果、65 人(当院で経過観察されている 36 名を含む)がアンケートに対し返信があり、評価対象となった。

結果：フォローアップ期間の中央値は 187 か月 (93.5~296)。手術時年齢の中央値は 36 歳 (12~69) だった。全体の生存率は 5、10、15、20 年でそれぞれ 100%、98%、95%、89%であった。5 名の死因は胃癌、肺癌、急性心不全、脳梗塞、原因不明で、いずれも大腸癌に起因するものではなかった。FAP に関連する新生物としては、大腸癌 23 例、十二指腸癌 5 例、胃癌 3 例、甲状腺癌 5 例、ポーチ内癌 2 例、デスマイド腫瘍 9 例だった。デスマイド腫瘍の発病率は手術日と密接な関係があった。根治手術から新生物発現までの期間に関しては、癌腫によって異なりがあった。54 人の患者のうちの 45 人(死亡、もしくは永久人工肛門となった症例を除いた)に関して、ウェクスナースコアを用いて、便失禁の程度を調べた。直腸粘膜抜去と手縫い吻合をしている患者は便失禁とウェクスナースコアとかなり関係があった。60 人のうち、58 人に対し、術後何らかの経過観察のための検査が行われていた。

結語：OS(全生存期間)は良好な結果であった。便失禁に関しては、手術手技に依存していた。おおむねの患者は術後の検査を受け続けている。